24-03_42- 発想安西4P.qxd 24.1.12 15:36　ページ 42

Lesson 212　発想する！授業

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

ボランティアスタッフとの対話から「学びの場」を考える

安西 春樹

提案：ボランティア活動や地域活動の実践者との対話から他者の「学び」を知る機会を設けてはいかがでしょうか。

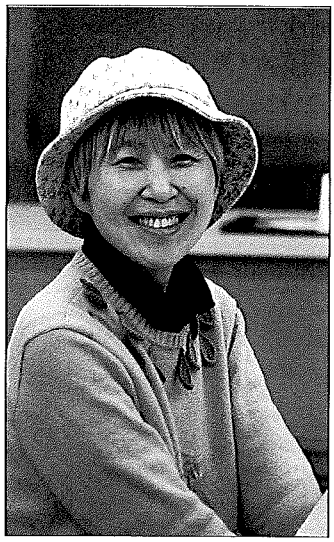
はじめに

知的障害のある方の学校卒業後の学びの場として中央区が実施する「中央区かえで学級」でボランティアスタッフとして活躍されている方に、関わるきっかけや現在の想いを伺う機会を設けました。

中央区かえで学級は、2022年10月号の本連載でも紹介しましたが、区立中学校の教員と知的障害のある生徒の保護者が中心となり昭和45年に開設した青年学級を母体として50数年の長い期間活動を続けている学びの場です。現在、中央区主催で年19回、年間通じて学習支援を行う専任講師とシフトを組んで学習補助を担当する助手、スポーツや創作活動の指導を行う科目講師といったボランティアスタッフの力添えをいただき活動を続けています。

今回は、スタッフの中で、学級生に寄り添い、学び合いの場を実践してくださっている助手のあきのかなこさんに話を伺いました。

あきのさんは、普段イラストレーターとして活躍され、かえで学級では比較的新しい仲間として2年ほど前から参加しています。今回、スタッフ応募のきっかけや、実際の活動を経験しての想いを話していただきました。


あきの かなこ さん

ボランティアのきっかけ

「私がスタッフに申し込んだ時は、まだコロナの制限がある時期で、アトリエ・ローゼンホルツという市川にある古本屋カフェに通って絵本の創作をしていたんです。今までのイラスト出展活動が皆無になっていて、「私にはこの絵本の制作がある！」という思いだけを支えにしていたころ、アトリエの方からある修道院に併設しているDVや家庭問題で保護された女性のためのシェルターの施設長さんを紹介いただきました。宿直のアルバイトができる人を探しているというので、その場で絵を描いていた私に声がかかったんです。

「すごく人付き合いが苦手で、ひとりで絵を描いてるぐらいしか何もできないし、あと金髪なんですけど大丈夫ですか」とまで先方に聞いてくれて（笑）。そしたら、基本的に1人シフトで、業務以外なら事務室で絵を描いてくれてても大丈夫。見た目はなんでもOK。シスターのおばあちゃまたちが10人ぐらい共同

生活してる敷地にあるけど、無宗教でもなんでも構わない。週に1回程度やってくれればいいからとのこと。これならなんとかできるんじゃないかと引き受けました。接客とか、誰かと一緒にとかは苦手なので、こんな条件はまたとないんじゃないか、また、少しでも生活の足しになればとも思っていたので、ありがたくもありました。ものすごくドキドキだったんですけど、週1回のペースで関わっていく内、その施設長さんがボランティアに興味があるならと難民フェスのボランティア、コロナ禍の食品配布ボランティアにお声がけくださり、私なんかにボランティアができるんだろうかと思いつつ、「やってみたい」という気持ちが勝って、絵だけの世界から一歩踏み出せたという感じです。

シェルターでは、利用者さん達は生活保護を受けている方がほとんどで、その保護費から食費なども払ってました。長居する民間のアパートではないので、すぐに他のグループホームに移っていくとか、急遽入室できるように行政が2部屋ぐらい確保してるのですが、一晩保護して次の日にはもういなくなっちゃうとか、今日いた人が次にはいないという感じで、週に1回だけ来る宿直アルバイトと寮生さんという関係で日々が続いていきました。食品配布ボランティアもそうですが、今の自分だったら一歩踏み出せるんじゃないかって、なぜか思えたんですよね。

食品配付では、初めて会うボランティアさんや、すごい行列でいろんな方がいらっしゃる中、食品を袋に詰めたり、お米を測って渡していくようなことをしました。自分もコロナの影響でイベントがゼロになり、アートの活動も不要不急と言われ、フリーランスや芸術活動への助成金も本当になかったんです。持続化給付金がありましたが、申請が殺到していて、申請から最初の給付が来るまで何カ月も待つ状況。その間「どうやって生きていけばいいの？」みたいなふうに自分も生活が苦しくなっていた時でしたので、寮に入ってるお嬢さんたちや食品配布の行列に並ばれている方は、自分と同じで何にも変わらない。私にはたまたま絵があって、そういうイベントがある世の中に生まれ、たまたま家族も絵の活動を応援してくれてるからコロナの時にちょっと助けてもらったりというのがあったのですが、どれひとつ欠けても、暮らしが立ち行かなくなり行き場を失ってしまう方々と変わらない、「同じだ」という風に、たまたまの上にやっと今の生活が成り立っていることを痛感したんです。

そういうボランティアや、寮のアルバイトを続けていく中、築地の母の仕事場にイラスト制作で間借りさせてもらうことになりました。近くの中央区立京橋図書館に通うようになり、そこでかえで学級のスタッフ募集のチラシを見つけて、行ってみたいな、なんか楽しそうだなと思ったんです。」

あきのさんのスタッフ応募ま

出展風景

でのきっかけ一つとっても、人にはそれぞれ、その時々の状況や、想いがあるのだと気付かされます。かえで学級には、あきのさんのような助手の方が20数名、講師・科目講師の方が10数名在籍していますが、それぞれに色々な想いや背景を持ちつつ、ボランティアとして参加してくださっています。スタッフの中には、私が関わっている期間よりもさらに長く関わって活動されている方が多くいらっしゃいます。知り合ってからも10数年を超える方が何人もいますが、活動の中で実はそれほどお互いを知っていないことに気付かされます。

行政の担当者とボランティアスタッフという立場は違いますが、お互いにかえで学級という学びの場の支援に関わる者同士、少しずつでもそれぞれの考えや想いを知ることは大切だと思いました。事業運営はそこに関わる「ひと」がつくっていくものですし、「学びの場」はその最たるものだと思います。

「一歩踏み出す」の実践

かえで学級のボランティアスタッフに応募していただいた方には、面接という形で学級の概要や、活動の様子、スタッフとしてやっていただきたいことなどを確認し、まずは見学から実際の活動に入っていただいています。あきのさんも面接にお越しいただきましたが、その時の気持ちも話してくださいました。

「今までの自分だったら踏み出せなかったと思うんです。もう自分なんか絶対ダメという風に。かえで学級の年間予定を見た時、みんなでお昼ご飯を食べたりするんだろうな、きっとそこでダメだろうなって。予定に宿泊もあり、「もっとダメじゃん」とも思いました。食事もお風呂もあるし、ダメだ、うん。調理実習もあり、作るからにはみんなで食べるんだろうなと、とぼとぼ帰っていたと思うんですよ。

昔の自分でしたら興味があっても自分の摂食障害を理由にあきらめていました。でも、シェルターや他のボランティア活動を経験して、今なら問い合わせるだけはできそうだと、ダメ元で、はじめて「摂食障害なんですけど」ってことをオープンにして言ってみようと思ったんです。超えられなければ叶わないから、難しいのならそれで帰ってくればいいだけなんだから、とりあえず言うだけ言っみようって。それで申し込みだけでもできたのが、また今までの自分と違って一歩踏み出せたところでした。」

「面接はもうドキドキしてて、摂食障害のことをなんて言おう、なんて言おうとばかり考えていました。専任講師の方が真ん中で、安西さんと係長さんがいて、「自分は摂食障害があって、食べたりってことが一緒にできないんですけど、それでも興味があって、食事は宿泊とかでも一緒にできないんですけど、それでも参加できるんだったら」みたいなことを言ったと思います。そしたら専任講師の方が「いやいや、かえで学級にはいろんな人がいて、食事中にうろうろしちゃう人もいれば、ゴミを置きっぱなしにしちゃう人もいるし、お弁当を忘れて買いに行く人もいます。電車の中で大きい声を出してしまい周りの人にちらっと見られたり。そういう風にいろんな人がいるから食べられないなんていうことは、かえで学級では全然変わったことではないんですよ」と言ってくれて、そこで初めて逆の意味で「思ってたのと違う！」って（笑）。そういう意味で衝撃でした。

今までお昼時間は、みんなでそろって食べなきゃいけないとか、その輪に入れない限り、人付き合いや、お友達ってできないという風に思ってたんですね。「同じ釜の飯を食う」という言葉があるように、飲食を共にできなければ友情を築いたり、つながりを持つことができないのか

と思うと、それに参加できない人は孤立しかないのか？それを超えたつながりだってあるのでは？とあきらめきれない気持ちを持っていたので、目の前が開けた気がしました。

「どうして食べないの」と聞いてくる人はたくさんいると思うけど、それさえ自分で説明できればいいんだよと。周りに話すことがご自分にとって苦しくないのであれば、食べられないなんて全然変じゃないですよとまで言ってもらえてびっくりでしたね。こんな自分でも入れる場所があるんだって。」

あきのさんの場合、ご自身の中で大きな壁があったのかと思いますが、人それぞれに色々なハードルを持っていて、なかなか一歩踏み出せないというのは、誰でも同じだと思います。かえで学級の学級生も、スタッフも、もちろん自分も同じように。一歩踏み出す時に、自分の中のハードルを乗り越えること自体が大きな学びなのだとお話を聞いて感じました。そして、きっかけはやはり周りの誰かの力だったり、誰かの一言であったりします。あきのさんの話の中では、施設長であったり、かえで学級のスタッフであったり。人付き合いが苦手と決めつけていたと思いますが、背中を押してくれたのも「ひと」で、それまでにつながりや付き合いを持っていたからこそだと。もちろん、根本はご自身の行動あっての学びだとも思いました。

活動の中でのひとり反省会

かえで学級の活動を終えると、その日を振り返ることが多々あるようで、ひとり反省会を頭の中で描いているともお話しされました。

振り返ることは大切なことで、自分なりの振り返りの仕方があったり、それぞれだと思いますが、自身の振り返り、他者の振り返りを共有して、「そういう考えもあるんだ」「自分だったらこうするかな」というのを繋ぐことでよりお互いの学びになるのではというのが、多分、社会教育なのかと思います。その点、事業担当者としては、今後のかえで学級には色々な人に関わってもらいたいと考えています。地域の方やちょっと見たいという人が来たり、色々な背景を持った人が関わると、学習の刺激になり、それが実は、障害者と健常者と区別するのではなく、同じ仲間という一括りになる。それが社会の潜在的な差別の解消にも繋がってくのではと考えます。あきのさんのように一歩踏み出すことができた時に、その背中を見た人がまた一歩踏み出せる、そのような循環ができたら大きな学びの場になるのではと対話を続けました。

「私もお話を伺っていて、移民、難民の方とか、生活保護を受けている方とか、それぞれにバッシングがありますよね。マイクロアグレッションというか。知的障害のある人、精神障害のある人に対しても無意識の差別はありますよね、やまゆり園の事件とか。入り口は違いますが、根底にある社会の問題は、結局その出口で同じところに集約されている気がします。ＬＧＢＴＱの方もそうですし。

そのあたり、共通しているのは〝よく知らない〟からなのだと思います。得体のしれない怖いものとして見るのでなく、当事者と出会って〝○○さん〟とひとりの「ひと」として知れば、怖いものではなくなるのだと思います。自分自身で体験したことほど強いものはないですし、知ることで、偏見や差別を生む大きな主語ではなく、自分と同じ〝身近な誰か〟になるのだと思います。まずは知ること、つながることが大事ですよね。

そういう意味でも体験としてかえで学級でも難民フェスに行ったり、レインボーパレードに行ったり、人同士の交流ができたらもっと楽しいんじゃないかな、社会を考えるきっかけにな

るんじゃないかなっていうのはありますね。」

かえで学級の課題として学習の主体とスタッフ間の共有の時間

学級の1つの課題として、学級生自身が「自分はここまでしかできない」と思い込んでるところがあります。学級生の中には、自らボランティア活動に参加してる方もいますが、多くの学級生は、「してもらう側」という意識が強く見えることが多々あり、それを取り払える機会が必要だと考えています。自分も誰かのためにできることがある、自分の行動の選択肢として、ボランティアや地域活動もできるんだというところに広げていければと思っています。生涯学習の根底にある自分自身が学ぶ主体という意識を持つこと、スタッフがいるから学ぶのではなくて、自分が学びたいから学ぶというところに、どのように気づいて、実感してもらうかがスタッフ側の責任だとも思います。自分がやりたいことをやりたいと言えて、それができるかできないかはまた別として、様々な人から助けをもらいながら試行錯誤していく。そしてこれが自身の「学び」だと気付く。あきのさん含めて、スタッフの皆さんにはぜひそういう個々の想いを引き出しながら学習支援に関わってもらいたいと思っています。

「同じ班のスタッフから「よく気が付いてくれるのは大切なところですが、なんでも手助けしようとしすぎずに、学級生さんの〝自分のことは自分でやる〟ことのサポートを必要なところだけお手伝いするという気持ちでいて欲しい」そして、「あきのさん自身が楽しんでください！」とアドバイスをいただけて、初めて手を出すことばかりが〝助け〟になるわけではない、それどころか自主性の妨げになってしまうのだと知り、反省しました。「スタッフの本分とは」「よい手助けとは」という奥深さに、あらためて難しさと課題にチャレンジしていきたいとの思いに至りました。」

「学級の時間内では、ほかの助手の先輩方とか先生方と話し合ったり、ポロっとした相談ができるような時間が欲しいとも思います。活動時間中はもう目いっぱいなので、ちょっと聞いてもらいたい話とか、相談などのタイミングもなかなか取れないので、どうしても孤独に自己反省するしかないというのはあります。

宿泊の時に、あるスタッフが、他の班の学級生の人たちとも話ができる場とか、助手の人たちだけで話せる時間とかの機会が欲しいとおっしゃっていて、私もいいなと思いました。他の班の人だと未だにお名前と顔が一致していない人もいるので、交流したいし、そういうのがあっても楽しいのかなと思っています。」

「たまに、私は必要ないのかなと考えたこともあります。学級生さんたちと過ごすのはすごく楽しいんですけど、スタッフ同士の人間関係とか、何かを感じた時、疑問に思ったり、気づいたときにそれを打ち明けたり、相談し合ったり、アドバイスしてもらったり、そういう相手や機会、時間がなくて、ずっと自分の中で折り合いをつけてきていたのも事実です。」

スタッフ同士で想いを受容・共感・共有できているかというのも、あらゆる活動の中で課題になるところです。ボランティア活動でも明確な目的があり、それさえしていれば人間関係は気にしないとしていれば、ボランティアという名目ではあるけれど、ただの下請け仕事になりかねません。本来のボランティアは、自分の思いと一緒に主体的に動けないと本末転倒だと思います。できる範囲や責任の所在の部分はありますが、その中で私はこうしたいとか、こうあった方がいいとか、ここはちょっと

24-03_42- 発想安西4P.qxd 24.1.12 15:36　ページ 47

疑問に思うということがあったら、周囲と意見をすり合わせて、よりよい活動を主体的に目指すのがボランティアだと思います。それには、ミーティングなどの共有する時間が大切になってきます。それも、フォーマルな場とインフォーマルな場があり、インフォーマルな場で出たちょっとした話がフォーマルな場でも出てくると、（フォーマルの）会議や打ち合わせが生きてくることがあるのだと思います。スタッフ同士が時間的な制限がある中で対話・交流を重ねて、情報を共有することが今後につながっていくと思いますし、それが自然とできるような環境を作っていくことが大切だと感じました。

「月に2回のかえで学級の時間内では足りないですよね。でも、私なんかからしたら、こんなにいろんな人がいて、それでも、みんなで笑っていて、盛り上がって帰ってこられる場所があるというのは、本当にすごいことだと思います。」

かえで学級が学級生にとっての貴重な学びの場であって欲しいのはもちろんですが、スタッフにとっても貴重な学びの場であって欲しいとの思いもあります。時には、他の自治体の学級を見て学ぶことも有効かと思います。幸い、その機会として年に1回ですが千代田区、墨田区、江東区の学級との交流イベントがあります。また、私が学生時代から関わっている練馬区の学級、以前に関わった北区の学級などもそれぞれ違った運営をしています。以前から本人活動を盛んにされている町田の学級や、渋谷の学級など、他の運営方法を知ることも今後のかえで学級にとってプラスになるはずですので、スタッフの学びとして、他学級に学ぶ機会も作れたらと考えています。

「以前、この雑誌のかえでの記事を、私のお客様にお見せしたら、その方から本当にかえで学級とその方の地域でやってることは全く違うという風に聞きました。本当に、ところ変われば全然違うんですね。

今後、助手の人とも、隙間隙間に普段何やってるのかとか、話を聞いてみたいと思います。学級のたびにコツコツ自分でも時間見つけて話したり、何か一緒に行動できたらよいかと思います。話し合って、さっき安西さんがおっしゃったように、これちょっとスタッフ会議で言ってみようかって話になって、それが思わぬ展開になったり、そこで発言してくださったことに対しては、敬意と感謝を伝えたいとも思います。思ったことを伝えるって大切ですよね。言わないと伝わらないし、「言わなくてもわかるでしょう」は無しにして、特に「ありがとう」と「ごめんなさい」は、言った方がいいなと思いました。それと挨拶、すごく大事ですよね。とにかく、こんなに楽しいところないと思います。」

活動の中での気づきと学び

実際のかえで学級の活動の中でも、たくさんの気づきがあると聞かせていただきました。作家仲間からは、アルバイトやボランティアで制作活動の時間が取れないのではという心配もされているとのこと。仲間の気遣いに、ありがたいと思う一方、かえで学級があきのさんにとってなくてはならないつながりと居場所になっていると話します。

「かえで学級のつながりで、中央区の街並み絵画展という催しに出展する機会をいただきました。中央区の描きたい風景を探すきっかけになったり、それまで人付き合いが苦手な経験もあって、「ひと」を描けないでいたのですが、風景の中に大好きな学級生さんやスタッフ、職員さんを登場させることができたんです。

そして、一昨年の四区連合レクリエーション大会では、参加

24-03_42- 発想安西4P.qxd 24.1.12 15:36 ページ 48

賞のタオルデザインを担当させていただき、自分の絵が２００人もの方々に渡って、初めてあった方からも「タオルの人だ！」と声を掛けてもらえることもありました。出展活動だけでは得られない経験です。

宿直のバイトも、かえで学級も、全て私の描く絵の中で共鳴し合っていて、今ではどれも自分を形作る三角形になっています。」

「開級式の時に、摂食障害のある自分を受け入れてくれたことのお礼を同じ班のスタッフに伝えた際、「障害のある方にどうぞいらしてくださいと言っておきながら、スタッフの障害は認めませんなんてナンセンスでしょ」と当たり前のように言っていただけたことも心に残っています。

障害をオープンにしても、その上で明るく話せる場があることに初めて出会えて、ようやく飲食をはさまなくてもひととつながれる場所を見つけました。長年の大冒険の中で宝箱を見つけたような感激です。」

この連載２０２３年12月号の松田道雄さんの担当回は、「コミュニティ」についてのテーマでした。その中に「共有する」「分かち合い」「情報の伝達」という語源からのキーワードがありました。かえで学級というコミュニティを考えた時、やはり松田さんの提案するように「会話をする機会や場」がカギなのだと考えさせられます。今回の一人のスタッフとの語らいの機会は、かえで学級担当職員の私にとってもさまざまな学びとなりました。まだまだ20数名のスタッフ一人ひとりの思いを続けて学ぶべきとも考えさせられます。スタッフ、学級生含めて、その先にかえで学級というコミュニティの創生があるのだとも感じました。

あきのさんとの対話で気づかされたことは、ボランティア活動の根本にある「誰かのために」という行動は、時として他者を大きく動かしますが、それ以上に本人の意識の変容を創り出すということ。新たに自身が得た意識の変容は、自分さえ気づかずに周囲にさらに学びを広げます。その学び合いについて気づくのは、こうした他者との会話の中で自身をふりかえる際ではないでしょうか。ボランティア活動、学習活動に関わるみなさんも、たまには他者との会話の時間を設けて、自身の変容を確認してはいかがでしょうか。ご自身が学び合いの輪の中にあることを実感できるかもしれません。私たちは支援者であったとしても、常に学習主体であり、生涯学習の実践者なのですから。

安西春樹
（あんざい・はるき）
中央区区民部文化・生涯学習課
総括生涯学習指導員

豊かな体験が青少年を育てる
―学校・地域・家庭が連携・協力―

編／伊藤俊夫　ISBN4-7937-0128-0　2003年9月25日発行　A5判 144頁 価格1650円（本体1500円+税）送料310円

【主な内容】Ⅰ　豊かな体験が人間をつくる／Ⅱ　体験活動を推進する（スポーツ　文化・芸術　家庭教育等）／Ⅲ　もう一つの公共サービス（ＰＴＡ　公民館　青少年教育施設　図書館　博物館　ＮＰＯ　学校支援ボランティア　等）／Ⅳ　知恵と意欲の結晶（総合的な学習の時間　自然体験活動　ボランティア活動の教育力　唱歌と童謡　就労体験　モノづくり　農業体験等）

書店にお申し込みまたは直接日本青年館　TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9026　までご注文下さい。